題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」

発行所

公益財団法人 友 愛

〒112-0002
東京都文京区小石川
1-10-13 小石川文天ビル２階

TEL:03-5684-3188
FAX:03-5684-3186
E-Mail:you-i@yuai-love.com
http://yuai-love.com

編集人：羽中田元美

隔月１回　10日発行

会　費(4月～3月)
個人／　3,000円以上
法人／10,000円以上

公益財団法人 友愛

第一回 定時評議員会開催

平成三〇年度計算書類・平成三〇年度事業報告書・平成三〇年度公益目的支出計画実施報告書承認

任期満了による評議員・理事・監事選任

公益目的支出計画実施完了

新たに三名の評議員・四名の理事・一名の監事が就任

二〇一九年六月二十二日（土）午前十時より、第一回定時評議員会が開催され、平成三〇年度計算書類・平成三〇年度事業報告書・平成三〇年度公益目的支出計画実施報告書が全会一致で承認された。

これにより平成二十三年より実施してきた公益目的支出計画は実施完了となった。

また、任期満了に伴う役員の選任も行われ、理事会より推薦を受けた評議員候補十二名、理事候補十二名、監事候補三名は、全員全会一致で選任された。評議員会終了後開催された理事会において、代表理事の選任が行われ、鳩山由紀夫理事が全会一致で理事長に選任された。

二〇一九年六月二十二日（土）午前十時の定刻より、第一回定時評議員会が開催された。

冒頭鳩山由紀夫理事長が挨拶に立ち、以下の挨拶を述べた。

鳩山由紀夫理事長挨拶

お忙しい中ご参集頂きありがとうございます。

今回は公益財団法人の認定を受け、初めての評議員会となります。

多くの方々のご協力を得て、また関係各位のご努力もあって、友愛は、公益財団法人となりました。

友愛山荘の運営を切り離さなければならないという、大きな試練もありましたが、これまでの活動、友愛理念の普及が、公益活動として認められたことは、大いに意義のあることだと考えています。世界情勢をみても、今こそまさに、友愛理念が求められているときだと感じます。

公益財団法人となったことを出発点として、皆様方のご協力を仰ぎ、未来に繋がる活動、事業を進めてゆきたいと思います。

今後ともよろしくお願いします。

続いて議長の選出に移り、戸澤英典評議員が互選によって選出された。

定数確認の後、西川理事からエヤップ派遣事業について、井田理事からミャンマー研修生受入事業について、攪上理事から友愛講演会及び小論文コンテストについて報告があった。

事務局から「第六回友愛国際写真コンクール」について報告があり、今年度の募集が開始された旨が告げられた。

報告事項を終え、協議に入った。先に長田監事により、監査報告がなされた。

協議事項

第一号議案／平成三〇年度計算書類に関して

第二号議案／平成三〇年度事業報告書に関して

第三号議案／平成三〇年度公益目的支出計画実施報告書に関して

第一号議案から第三号議案に関して一括質疑となり、議長の指示で羽中田事務局長が詳細について報告した。平成二十三年より続けてきた、公益目的支出計画実施については、予定の十五年を約半分に短縮、八年間で終了となった旨が報告された。

評議員会で、鳩山由紀夫理事長より詳細な事業報告が行われ、要覧を手に全員が確認した

第一号議案から第三号議案はそれぞれ全会一致で可決承認された。

第四号議案／任期満了に伴う理事の選任

第五号議案／任期満了に伴う監事の選任

第六号議案／任期満了に伴う評議員の選任

任期満了に伴い、理事、監事、評議員の選任が必要で、先の理事会で協議された推薦候補の一覧が示され、この一覧表及び必要資料が事前に各評議員の手元に届いていることが確認された。

その後それぞれの役職について、一覧表に基づき一人一人について決議を行った結果、理事会が推薦する候補全員が選任された。

永年に亘り常務理事として友愛の牽引役を務めてきた川手正一郎氏は、最高顧問に就任した。

その後平成三十一年度事業予算及び事業計画も承認され、評議員会は終了した。

任期満了による役員の選任は評議員会の重要な職務の一つである。全員が真摯に向きあって協議

役員名（敬称略）

理事長／鳩山由紀夫

理事／茂木健一郎・井上和子・芳賀大輔・井上浩義・井田安信・西川伸起・攪上哲夫（以上再任）

中島政希・高邑　勉・鳩山太郎・山嵜偉広（以上新任）

評議員／谷藤悦史・戸澤英典・福田八州雄・萩原直三・近藤純子・小峰秀子・酒井芳彦・櫻井洋輔・田中正基（以上再任）

李　慶達・川手祥右・髙橋佳大（以上新任）

監事／金沢俊弘・長田正太郎（以上再任）

海方　亨（新任）

……

第四回臨時理事会開催

評議委員会終了後、午前十一時三〇分より、代表理事選任のための臨時理事会が開催された。

新任の理事、監事を含め十一名の役員が出席し開催された理事会において、互選の結果、鳩山由紀夫理事が代表理事に選任され、鳩山由紀夫理事はその就任を承諾した。

新任の理事・監事も参加して、代表理事の選任が行われた　臨時理事会

論語に学ぶ友愛講座

参加者募集

深く知れば知るほど興味と面白さの増す「論語」。
友愛では論語で語られている様々な言葉の中に、友愛の理念に通じるものをさらに詳しく学んでいくため、講座を開設します。
講師には、論語を学ぶにはこの方と大人気の安岡定子先生をお迎えし、楽しく論語をひもといていただきます。
参加ご希望の方は、同封の申し込みハガキに必要事項をご記入の上、事務局宛お送りください。詳細は友愛ＨＰ（yuai-love.com）にも掲載。

開催日（全５回）　①９月14日(土)　②11月９日(土)　③12月14日(土)　④2020年２月８日(土)　⑤2020年３月(日程未定／講師：鳩山由紀夫)
時　間　全回とも14：00～16：00（一回毎のお申し込みは受け付けておりません。全５回の行程でお申し込みください）
会　場　友愛サロン／文京区小石川１-10-13　公益財団法人友愛事務局３階
参加費　学生1,000円　　会員3,000円　　会員外　5,000円（いずれも一回につき）
定　員　46名（応募多数の場合は抽選）

＊ご不明な点は、事務局（電話　03-5684-3188）までお問い合わせください。

第三十一次植林訪中団

遼寧省北票市にて最後の植林活動実施

日中緑化交流基金による植林活動終了
緑の山々を描いて地元学生達と皆で植林

二〇一九年五月二十一日（火）から二十四日（金）の四日間、第三十一次植林訪中団が中国遼寧省北票市を訪れ、植林活動を行った。

二〇〇一年から約二〇年間続けられたこの植林活動は、今回の北票市の活動を以て終了した。

日中緑化交流基金（通称小渕基金）によるこの植林活動は、一〇〇億円の資金を以て始まったが、活動を継続するための新たな資金が導入されず終了となった。参加する日本国内の団体からも、中国側からも継続の希望が強く寄せられ、関係各位も様々な努力を続けていたのだが、資金の導入がないところから終了の止むなきに至った。

今回の北票市は第四期にあたり、第一期から第三期は鳩山由紀夫理事長も参加して植林した、当財団友愛にとっても思いの深い場所である。また、永年カウンターパートとして力を尽くしてくださった中国国際交流中心の洪桂梅副主任の故郷でもあり、思いも強い。

北京から新幹線で到着した瀋陽からマイクロバスで六時間、北票市に到着。翌朝またマイクロバスに揺られて三時間、現場に着いた。

地元の学生達、ボランティアの方々が大勢待ち受けていてくださった。

毎年強風の中、起工式の式典を行った記憶があるが、今年は快晴、気温三四℃、空が眩しいほど青い。

全員で苗を植える。乾燥地域なので、植えるとすぐにたっぷりの水をやる。小学生の子どもたちもバケツを持って走り回り、次から次ぎへと苗に水を運ぶ。

大きく育て、元気で育ての思いは、皆の共通の思いである。

十年後、今は土埃の舞う土色の山が、緑に覆われる日を信じて、最後の木を植えた。

（羽中田記）

この上ない好天、照りつける太陽のもと、関係各位と友愛植林訪中団、ボランティアで参加の学生たちが記念撮影。遠くに見える山は、数年後緑に覆われ、爽やかな木陰と自然の恵みをもたらしてくれるだろう

緑の一帯一路

―植林事業の終結にあたって―

最高顧問　川手正一郎

日本政府の小渕基金による中国での植林事業は今回の北票市で、そのすべてを終了しました。

二〇〇一年一月十六日から始まったこの事業は、中国での生態系保護と人間交流による真の日中友好に大きな成果を齎したものと確信します。

国と国には国境はあるが人の心と緑に国境はない。人間は全て平等。相互尊重、相互理解、相互扶助は全人類共通の目的であり、使命です。

二〇〇一年以来、今日まで中国の皆さんと友愛が行った植林事業の具体的成果は、植林面積三百七十八万千四百（3,781,400）ヘクタール、植樹五百七十九万七千三百二十三（5,797,323）本、政府助成金五億一千四百五十四万五千九百六十九（514,545,969）円となりました。また、この間、植樹祭に参加した中国の皆さんは二万名以上と想います。

ちなみに第一回の植林は二〇〇一年一月十六日でしたが、その場所は広西省チワン自治区、柳州市来賓県でした。参考までに小生の日記を見ますと、

1月16日

前夜24時10分、柳州空港着。ホテルは京都賓館。午前2時まで地元全青連の方々と夜食会。

今朝は7時起床。8時30分ホテルを出発。

柳州市の人口は88万人、大きな都市。植樹祭はここから60キロ先の来賓県。朝から雨、凸凹の土の道。揺れが酷く、車の天井に頭がぶつかる。植林地は紅水河上流。木は全くない砂漠の台地。上から見下ろすと紅水河に大きな船が停まっていた。台地の一番高いところに祭事の舞台が設えてあり、笛や太鼓で賑やかに出迎えてくれた。

参加者は地元の青年男女一五〇〇名。竹を植える由。式典終了後、用意された長靴に履き替え、泥の中での植樹。竹は土砂崩れを防ぎ、泥を流さず砂防の役割を果たすとの説明がありました。

11時式典開始。12時30分植林終了。

14時から16時来賓県の皆様との歓迎昼食会。16時15分～17時、職業高校見学。17時15分～19時20分県庁にて地元青年団体との交流及び討論会。その後21時まで夕食会。21時来賓県を出発。荒れた道路。24時過ぎホテル帰着。

日記を読むと当時の状況が鮮やかに甦り、懐かしく、多くの事が思い浮かびました。

また植林地は一度の訪中で二か所の植樹祭もあり、延べ四〇ヵ所と推定されます。

それにしても最初の頃は想像もしていなかった満十八年間三十一回もの植林事業の継続は、振り返りますと夢のようにも映ります。そしてお世話になった全青連の皆様、関係各位のご指導ご支援に対し、心から感謝と御礼を申し上げるとともにこれからの中国が緑輝く大地となりますよう祈ります。

植林の最初の頃は、広大な中国大陸の生態系保護という壮大な目標に大変だなと思っていましたが、中国の多くの方々と出会い、中国の人々の心の優しさがやがて満開となり、中国は素晴らしい緑の楽園になると確信した次第です。

小渕基金の植林事業は終わりましたが、中国での植林事業は中国国内はもとより、日本からも多くの団体、企業が率先躬行しており、われわれ友愛も新たな独自の課題が提起できればと念願しております。

願わくばユーラシア大陸を緑の一帯一路で繋ぎ、関係各国の人々に益々、潤いと安住の大地となるよう期待します。

三十一回の植林事業終了にあたり、長い間、植林事業に参加できました喜びを心から光栄と存じます。そして、これも偏に全青連や友愛の皆様のご指導の賜であり、心から感謝と御礼を申し上げ、植林事業の結びの言葉といたします。

ありがとうございました。

川手常務理事（右）と洪桂梅副主任（中央）が、最後の植林に精をだす。二人とも万感の思いを抱いて

定評のある川手常務理事の挨拶も、これが最後。かみしめるように一言一言に聞き入る

気温三十四℃、抜けるような青空、陽炎がもえ空も山もまるでゴッホの絵のようにうごめいていた

給水車からバケツで苗に水を運ぶ。子どもたちも精一杯走りまわる。地元の方々の期待も大きい

訪中団の川手祥右さん（左端）も、地元の学生達と力を合わせて苗木を植えていく。今回は穴掘りも

子ども達が苗木を支えてくれている。そこに乾いた土を掛けていく。そして水やり。大きく育てと祈る

二〇一九年度国際交流事業　ＯＪＡＢ学生派遣
六名の学生が勢揃い　それぞれの抱負を語る
八月五日から八月十五日までＯＪＡＢにて研修

公益財団法人友愛が、国際交流事業の一環として行っているＯＪＡＢ（エヤップ）への学生派遣事業は、今年度も全国から定員の六倍近い応募があり、若い情熱に溢れた申し込み書類が殺到した。選考委員会で選考の結果、六名の学生派遣が決まった。参加に届かなかった学生諸氏の評価も高く、来年の捲土重来を期待したい。

参加学生から寄せられた抱負を紹介します。（掲載順不同）

初訪問のウィーンに心を躍らせて
名古屋大学四年　木本康瑛

この度、ＯＪＡＢ派遣プログラムに選抜して頂きありがとうございます。名古屋大学医学部医学科四年の木本康瑛と申します。大学では、硬式野球部と留学生サークルに所属しています。合格を知らされた時は、まさか自分が選ばれるとは、という驚きと共に喜びの気持ちでいっぱいになりました。個人の旅行では体験できないような様々な経験を通して、多くの事を吸収し、オーストリアの高齢者介護や難民課題について深く学びたいと思います。

また、各種プログラムを通しての現地学生との交流もとても楽しみにしています。是非、この機会に海を越えて、切磋琢磨できる同世代の仲間とのつながりを作っていきたいです。また、日本とオーストリアの文化の相互理解も深めたいと思っています。

十日間という短い期間ですが、一日一日を無駄にせず、たくさんの事を吸収していきたいと考えています。皆さん、どうぞ宜しくお願い致します。

これまでとこれからを繋ぐ研修へ
名古屋大学三年　後藤大智

大学生になってから二年間で、アジア地域にある五カ国に行きました。

そこでは、ＪＩＣＡ・大学が中心に取り組む法整備支援事業や、急速な経済発展と民主化への動きを垣間見ました。

日本と発展途上にあるアジア諸国を比較することで、専攻として学ぶ行政学・地方自治・地域政治について、よりよく理解することができるようになりました。

ここに、オーストリアに行き、新しい視点から見ることによって、今までに気づかなかったことや分からなかったことを明らかにしてくれると思います。

特に、難民救済や福祉事業、核の禁止といった、今後日本やアジア地域でもさらに注目される課題と向き合い、取り組んでいるオーストリア・ＯＪＡＢからは、非常に多くのことを学べると期待しています。

本派遣事業の終了後、大学のプログラムで香港大学に一年間留学し、専門分野の学習を深める予定です。オーストリアでの経験や学習が、香港でのさらなる学術的理解を助け、その後の人生にとってもかけがえないものとなるように、初めてのヨーロッパ・オーストリアを味わい尽くしたいと思います。

六名が感じたことを大切に
早稲田大学二年　森﨑桃子

今回機会を頂いた事を大変光栄に感じています。

現地では、実際に移民問題に携わっている方々と積極的に交流し、自分が見聞し感じた事を発信して、この問題について考えるきっかけを少しでも作りたいです。また、日本とは違う文化世界の中での価値観の違いを体験し、自分の視点を増やしたいです。

大学生六人で参加させて頂くため、全員で感じた事や、自分達がこの体験を通してどう行動していきたいかを考えながら、一緒に時間を過ごしたいです。

私たちが行ってみる事で少しでもいい変化が自分自身にも、そして社会にも起こす事ができるように、使命感を持って取り組みたいと思います。

派遣事業への意気込み
一橋大学四年　吉田大志

ＯＪＡＢへの派遣学生に選んでいただき、本当にありがとうございます。本派遣事業への参加を実りあるものとするために、事前準備を怠らず、オーストリアで得られるだろう貴重な経験を広く世の中に発信していく所存です。

大学では経済学部に所属しており、中でも医療経済学に関心を持っています。医療経済学とは、医療行為をサービスとみなし、その価格決定や質の担保に政府や自治体がどのように関与すればいいのかについて分析する経済学の一分野です。現在は学部卒業の集大成として卒業論文に取り組んでおり、日本における医師と歯科医師の地域間での偏在をもたらす要因について、統計的に分析しています。

本派遣事業でＯＪＡＢが運営する高齢者用住宅を訪問することで、オーストリアにおける福祉を巡る環境についての理解が深まり、高齢社会に起因する様々な問題に直面している日本のあり方について改めて考える機会となるであろうと期待しております。

これからの糧となる学びを
東北大学三年　阿部真悠子

在学中に国際協力事業に関わりたいと考えていたため、このプログラムへの応募を決めました。

難民問題は近年報道でよく取り上げられており、現状の深刻さと世界各国が有する責任について自分なりに考えることも多いテーマです。そのため、この度数少ない派遣学生として選出していただき、多くを学ぶ機会を与えていただけることを、大変光栄に思っています。

日本で暮らす限りではあまり身近に感じ得ない問題だからこそ、実際に当事国へ赴くことでわかることが多くあるのではないかと考えており、現地でどれだけ自分の視野を広げることができるか今からとても楽しみです。

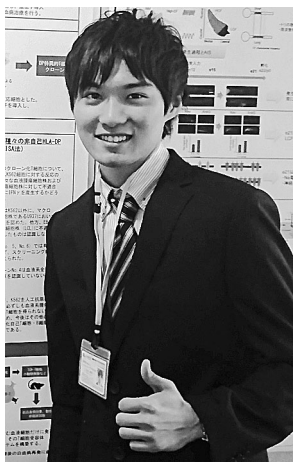
またプログラムの中では、多くの人々との出会いを大切にしたいです。積極的に交流を深めることで、現地情勢や彼らの経験を「自分事」として捉え直し、これからの自分にできる「何か」を見つけることができたら良いと思っています。

人生の次のステップのための二週間
慶應義塾大学　大学院一年　成田　葵

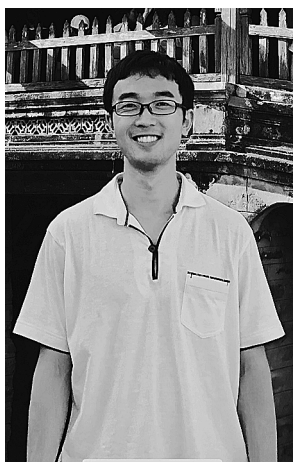
この度、ＯＪＡＢへの派遣学生に選出して頂きました、成田葵と申します。

私は将来、脆弱性のある人々が生きやすい社会を作りたいと思っています。彼らの選択肢を増やすことは、彼らの人生がより意義あるものになると同時に、国際社会全体が効果的に機能することに繋がると考えているからです。特に難民問題については、大学院の授業を通して、都市に暮らす難民や難民の経済的側面など、様々な角度から勉強しています。しかし、勉強する中で、難民一人一人の気持ちや支援する側の思いを知りたい、加えて難民支援をするにあたってＮＧＯ・政府・国際機関にどのような違いがあるのかを模索したいという気持ちが強まりました。この貴重な機会を活かし、ウィーンだからこそ学べる事をしっかりと吸収したいと思います。そしてプログラム終了後も、難民支援の現場に触れた経験を生かし、将来のキャリアの中で、具体的にどのように国際社会に貢献できるかを考えたいと思います。

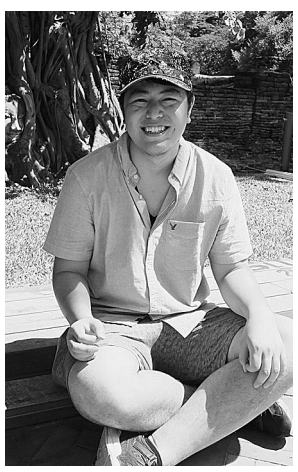
東北大学
法学部　３年
阿部　真悠子さん


名古屋大学
医学部　４年
木本　康瑛さん

慶應義塾大学大学院
法学研究科修士１年
成田　葵さん


名古屋大学
法学部　３年
後藤　大智さん

早稲田大学
法学部　２年
森﨑　桃子さん


一橋大学
経済学部　４年
吉田　大志さん

遼寧省北票市 長皋郷学校 訪問

書籍寄贈大喜び・返礼に書道・切り絵・ダンスを披露

紙芝居「かさじぞう」に目を輝かせて

五月二十三日（木）友愛植林訪中団は、植林現場である北票市長皋地域にある「長皋郷学校」を訪問した。

これは地元の中華全国青年連合会の要請に応えたもので、友愛について、また日本の文化について紹介して欲しいとの事であった。

長皋郷学校は、幼稚園から高等学校まで、年齢層の広い生徒が通っている、地域では最大級規模の学校で、広大な敷地内に入ると小さな子から高校生までが、門の前で列を作って迎えてくれていた。

交流会の会場となった体育館には、幼稚園児も参加しており、それでも全員が行儀良く、きちんと列を作り座って待っていた。

川手正一郎常務理事の挨拶・講演に次いで、当財団からの贈り物「書籍」の贈呈が行われた。書籍の中には、中国語で書かれた絵本、グリム童話の他、『ドラえもん』全巻揃いもあり、子どもたちは緊張の面持ちの中にも笑顔で受け取った。

続いて返礼にと、子どもたちのダンスが披露され、小学校低学年の子どもたちが、日頃の練習の成果、見事な演技で舞台を飾った。

また、傍らでは高校生による、書道の実技披露、伝統工芸である「切り絵」の実技披露も行われており、それぞれ真剣な表情で作品に取り組み、見事な腕前を披露、拍手が湧いた。

こちらも返礼として日本の文化の一つである、「紙芝居」を披露する番である。

まず紙芝居ついて紹介し、全員に「見たい人手を挙げて！」と問いかけると、全員が元気良く挙手。代表団の一員川手祥右さんが、皆に話しかけるように紙芝居を読み、中国青年国際交流中心の崔さんが通訳、全員が目を輝かせて舞台を見つめていた。

別れを告げるのも惜しい気持ちで学校を辞去した。

皆楽しんでくれたのだろうかと、一抹の思いを抱きながら臨んだ夕食会で、意外なことを聞いた。

「今日の紙芝居のかさじぞうのように、植林という良いことを続けていれば必ず報われる」と子どもたちが話しをしていたというのだ。何て素晴らしい！　半日以上車に揺られた疲れが吹き飛んだ。（羽中田記）

子ども達は行儀良く並んで、友愛一行の到着を待っていてくれた。皆日本人に会うのは初めてだとか

書籍の贈呈。中国国際青年交流中心の崔さん（右端）も笑顔で本を手渡す。子ども達は緊張ぎみ

川手祥右さんの紙芝居披露。練習の甲斐あって、なかなか堂に入ったものであった

紙芝居見たい人の問いに、元気に手を挙げる子ども達。素直な眼差しと笑顔が記憶に残る

高校生の技術披露。すらすらと見事な筆捌きで論語のなかの語句を書いてゆく

こちらも高校生による実技披露。伝統工芸の「切り絵」を実際に作り、プレゼントしてくれた

地域の名産である瓢箪に、文字や絵が描かれている。五〇センチ近い大きな瓢箪が見事！

西安外国語大学附属高校訪問

記念植樹実施

学生との交流実施

三月十六日（土）植林に訪れた陝西省麟游県から北京に向かう道すがら、地元西安市の要望で、西安外国語大学の附属高校を訪問した。

高校の敷地に入ったとたん、ピンマイクをつけた女子学生のリードによる「呼びかけ」風の歓迎の意が、待ち受けていた学生達で披露された。

その後、用意されていた記念植樹を終え、校内へ移動。大勢の学生に拍手で迎えられた。

鳩山由紀夫理事長と川手正一郎常務理事は、この歓迎に応え「友愛について」簡単なスピーチを行った。

日本語学科の先生の指導による日本語の歌と踊り、民族衣装に身を包んだ学生達による踊りなど歓迎の出し物が続き、友愛訪中団一行も笑顔が絶えなかった。

大学附属高校ということもあり、高校生の頃から選択すれば日本語が学べるというこの高校では、日本語は人気の学科ということで、多くの学生が流暢な日本語を話すことができる。

日本もこの学生達の姿勢を見習って、世界の平和に役立つような、学問の追究に励んで欲しいと思った。

外国語大学学長・附属高校校長等と用意された大きな記念の樹を植える鳩山理事長ご夫妻
プレートも作られており、鳩山由紀夫理事長の名が記されている
後ろの建物は、学生が住む学生寮と学校関係者の住居。全てが揃って町のようである

各学年が趣向を凝らし、歌や踊りを披露してくれた。日本語の歌も見事に踊りながら歌っていた

学校の入口に学生が並び、「呼びかけ」のメッセージを披露。大歓迎を受けた

公益財団法人　友愛

会員登録受付中

公益財団法人友愛は、皆さまのご支援で活動を続けております。
会員登録（個人・法人）をしていただき、これからの友愛活動にご協力ください。
＊申し込みはHPからも可能です。
＊申し込みハガキご希望の方は事務局まで
電話03-5684-3188

編集後記

◆友愛に入会して六十七年目を迎えました。貧しく、無知。取柄は若さだけ。しかし、友愛に対する志は誰にも負けないと自負していた我が青春！！人生のすべてを友愛中心に考え、サラリーマンでは時間が自由にならず二十九歳で起業、今日まで精一杯頑張り、生き続けて来た人生を幸せに思います。多くの人に出会い、己の愚かさを知り、友愛の人間像を目指し、精進しましたが、常になお足らざるを憂うの御粗末さで晩節を迎えました。しかし、友愛に燃焼できましたことを誇りに思います。そしてこの六十六年間に悔いはありません。友愛に関連するすべての方々に感謝を申し上げますとともに、公益財団法人友愛の発展を心から祈念します。

編集後記を書き続けて何年になるのかわかりませんが、小生にとって、これが最後の記実です。本当に有難うございました。

◆七夕の彦星と織り姫は、実は一五二兆キロも離れているとか。ラジオで聞いてビックリ！　光の早さでも十六年。年に一度会うのも大変なことです。でも夏の夜空に天の川を見つけ、両岸の二つの星を探すのも、夏ならではのロマンチックなひととき。恋心、貴重な逢瀬、満点の星空、いつまでも残しておきたい物語。それには環境保全が肝要。心引き締めて再認識。（も）